

思考力を育む社会科指導の在り方

ー 個人の思考を構築した上での話し合い活動を目指して ー

宇留野 優人

教育実践高度化専攻

教育方法開発コース

1 テーマ設定の理由

昨年度、茨城大学教職大学院において、「個人の思考の確立と話し合い活動による意見の変容 - 動画資料の活用とリアリティに基づく対話 - 」というテーマで研究に取り組んだ。実習における授業実践を通して、個人の思考を確立させることを目的とした動画資料の活用や、リアルな追体験としての話し合い活動について有効性を感じることができた。今年度は、昨年の研究に加えて、個人の思考を構築させる方法及び、より深い学びを創造する話し合い活動の在り方について研究を進めた。

本研究では、中学校社会科に焦点をあて、思考力育成を目的とした「つながり、考えを深める」授業の指導方法について、必要な手立てや支援を考察しながら論究していく。生徒が個人の思考を構築した上で話し合い活動を行うことが目的である。

これらのことから、本研究のためには授業実践を通した取り組みを「思考の構築」と「話し合い活動」の二つに分けて行う必要があると考えた。そのために、単元を通した授業実践を行い、ワークシートの活用によって生徒の思考の見える化を図り、生徒の思考を見取ることで実践に対する有効性を検討した。

2 基本的な考え方

(1) 思考力の育成について

学校教育において、思考力の育成は、評価の3つの観点に属するほど重要視されており、知識・技能を獲得した上で活用することができる力の一つである。OECD(2020)¹⁾は未来を定義上、予測不可能とし、知識、スキルに加えて、**Reflectiveness**を中心とするコンピテンシーを提示している。結果として、生徒が馴染みのない状況で自分をナビゲートし、教師から固定された指示を受けるのではなく、自身の責任で方向性を見つけることを学ぶ必要性を強調している。ここからも生徒ひとりひとりの思考力を向上させ、確立させることの重要性が伺える。

教育学者の小島亜華里は哲学者のロバート・エニスの批判的思考について言及し、「思考力を育成するためには、認知的側面の指導に加えて、情意的側面を指導する必要がある」²⁾と述べている。認知的側面とは、決して他者に感情移入することではなく、相手の立場に立って物事を考察することである。情意的側面とは学ぶ側の意欲を指す。ロバート・エニスの時代の教育現場と現在の教育現場は時代背景が異なるものの、思考においては援用することが可能であると考えられる。

以上より、本研究では後述するルーブリック評価を先に提示したパフォーマンス課題を単元の思考の軸として、認知的側面及び情意的側面の指導を行い思考の構築を目標とした授業実践を行った。単元の中の全授業を通して思考を巡らせる土台となるものを思考の軸と呼ぶ。思考の軸を作成することで学びに連続性が生まれ、学級全体として学びに取り組むことができるようになると考えた。

（２） 個人の思考を構築した上での話し合い活動

ア 話し合い活動について

『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編』の「社会科改訂の趣旨及び要点」に「話し合いの指導が十分に行われずにグループによる活動が優先し内容が深まらないといった課題が指摘される」³⁾ とあるように話し合い活動が形骸化している面も見られる。

「合意形成」は少数意見・多数意見の両方を検討しながらも、時に全員の納得を得られない性質があり、学級全体に意識を共有した上で話し合い活動を行うことが必要不可欠である。

以上を踏まえて、授業実践では肯定的な声掛けに加え、ルールとは生徒が話し合いを行う上で安心感を担保することであると認識し、話し合う内容について全体として理解した上で話し合い活動を実施した。

イ 思考の構築と話し合い活動

思考力を育成するためには他者の意見を用いて思考を広げる必要がある。昨年度は個人の思考について「思考の確立」と定義づけて研究を行っていたが、本年度は「思考の構築」と定義づける。「思考の構築」とは今までの知識や経験を踏まえて自分なりの不完全な結論を導き出すことである。個人で構築された思考が、話し合い活動を通して他者の意見を取り組むことによって、より豊かな思考になっていくと考える。

３ 実践の概要

ア 思考の軸を作ることを目的としたパフォーマンス課題とルーブリック評価

思考力を育成するためには、単元を通して思考の軸を作成することが重要である。今回は思考の軸としてパフォーマンス課題を活用し、ルーブリック評価を事前に提示することで、単元を通して考え続けることが可能になると同時に、思考の軸（パフォーマンス課題）を解決することで単元の目標を達成できるようにした。また、ルーブリック評価では個人評価・他者評価・教員評価と多面的に評価することが可能になる。自身では記載・表現できていると思っけても、客観視するとそうではない「気づき」を与えられる。思考の軸であるパフォーマンス課題を中心として、学級全体の学びの連続性を慮り、ルーブリック評価を用いて個人の思考に第三者の思考も組み合わせることにより深い学びが作られると考える。

そこで、今回は「なぜ江戸幕府は長く平和な時代を作れたのか」という課題を小学校段階での既習事項や年表から生徒とともに作成することで、課題に切実感がより高まると考えて実践を行った。

イ 思考の認知的側面及び情意的側面を育成する授業づくり

認知的側面の育成には、授業内で獲得した知識・技能を活用して様々な立場に立って物事を考察することが必要である。そのため、生徒が十分な知識・技能を獲得することが最優先事項である。認知的側面を育成する授業づくりを行ううえで、知識・技能を獲得する時間と、様々な立場に立って考察する時間を区分した。考察する時間を設けることで、ひとつの事象に対して様々な立場に立って考察し、物事を多面的・多角的に捉えるようになる。

情意的側面の育成には、生徒の意欲を引き出すための工夫を以下の通り行った。

まず、生徒自身が獲得した知識を可視化することを目的として、単元の導入とまとめの授業で同

様の課題について解答することである。また、五人組やキリスト教について思考を深める「大収穫ゲーム」を行うことで、当時の民衆になりきり、生徒が活発に活動する授業を行った。加えて、学級全体として対話的な学びは得意であるものの、文章化は不得意であるという子ども理解から、単語のみを指定した思考の文章化活動を行った。言語化活動は生徒によって得意・不得意が分かれるため、段階的な支援を行うことで、生徒自身が能力に合った難易度を選択し、全員が自身の力で言語活動を行うことができるようにした。

学習指導要領における学びに向かう力・人間性のように、学びたいという気持ちや学ぼうとする意欲、知的好奇心こそが思考力を育成すると考え、学級の生徒全員が意欲を持てるようにすることを目標に授業づくりを行った。

ウ 個人の思考を構築した上での話し合い活動

思考力の育成を目的として、個人の思考を構築した上で話し合い活動を行う「思考を広げる話し合い活動」を行った。江戸時代の身分制度の中で、幕府の庶民支配の方法に着目した。特に「えた・ひにん身分」の人々の生活に着目し、考察した。

個人で調べ、考察したことをグループで共有することで様々な見方・考え方を行うことができると考える。話し合い活動では、不正解はないことを生徒と共有し、ルールを定めて話し合い活動を行った。

4 実践の考察

(1) 思考の軸を作ることを目的としたパフォーマンス課題とルーブリック評価

第1時と第6時に同じパフォーマンス課題に対する解答を得た。記述内容の質的・量的な変化が見られた。

思考の軸の作成に関しては、パフォーマンス課題を生徒とともに決定することができた。生徒とともに学習課題を設定することで、単元内の授業を思考の軸に従って思考し続け、印象に残った言葉や興味・関心のある事柄を記載している様子が見られた。今回の授業では江戸初期を扱ったが、中期・後期の単元を通して同様の課題を行うことが可能であり、結果として、授業・単元に連続性が生まれる思考の軸が作成できたと考える。

単元の導入で効果的なパフォーマンス課題・ルーブリックを作成することができたことが効果的であったことが評価においても96%の生徒がB以上の評価を獲得したことからわかる。思考の軸に従って学習を進める中で、学習課題そのものに疑問を抱く生徒も見られたため、パフォーマンス課題・ルーブリック評価を生徒とともに作成し、学習状況に応じて臨機応変な変更を行うことで、豊かな思考力が育成されたと感じた。

(2) 思考の認知的側面及び情意的側面を育成する授業づくり

ア 認知的側面に立って

認知的側面を育むことを目的とした授業として、「大収穫ゲーム」を行った。「大収穫ゲーム」を通して窮地に追い込まれた際の百姓の願いの疑似体験を行った。百姓の立場に立って、互いが影響しあっていることを思考することができたため、認知的側面を育むことができたと考えた。

イ 情意的側面に立って

情意的側面を育むためには「見通しを持つこと」「子どもが活発に活動すること」「生徒の苦手な面を踏まえて活動を設定すること」の3点が必要だと考えた。

私は単元の「見通しをもつこと」を目的として、パフォーマンス課題・ループリック評価を行った。パフォーマンス課題では、全員が意欲的に取り組めたという点から情意的側面を育むことができたと考える。

「子どもが活発に活動すること」も「大収穫ゲーム」を行った目的である。活動を意欲的にを行い、その後の言語化活動に繋がっている点から、情意的側面を育むことができたと感じる。

「生徒の苦手な面を踏まえて活動を設定すること」を目的として、「話すことは得意だが言語化活動は苦手」といった子ども理解から諸外国と幕府の関係と、国内での幕府の関係を、単語のみを指定し言語化する活動を行った。活動前に、言語化活動を行う趣旨を共有することで、言語活動に使用することを目的とした調べ学習を行えた。ICT 機器への入力等選択肢の幅を広げることで、個別最適な学びが可能となり、個人に合った思考力の育成が可能になると予想される。

（3）個人の思考を構築した上での話し合い活動

思考力を育むためには、個人の思考のみではなく、他者の思考・意見を受容した上で再び自分の考えの構築を行うことで、より深い学びができると考える。

授業内で二つの設問を扱い、正答率・解答率に差が生じた。正答率が低くなった要因として、解答の根拠を自身で探す必要があり、生徒が自身の解答に自信を持つことができなかったことが挙げられる。私は、思考の構築が話し合い活動を活性化させると考えて仮説を立てたが、十分な成果は得られなかった。その理由として、安心できる環境が根底に必要だということが理解できた。今回は解答の根拠となる資料を同一にすることで、解答が他者と重なる部分があり、安心できる環境が整えられると感じた。

5 今後の課題

本研究をとおして、思考の軸を作成し、認知的側面及び情意的側面を育む授業づくりを行うことで思考力が育成されることが確かめられた。しかし、個人の思考を構築することと話し合い活動についての関係性を十分に明らかにすることができなかった。個人が設問に対する解答・思考案を持つことで、他者と意見を交流し、他者の意見を受容することで深い学びができると考えていた。しかし、話し合い活動には、生徒の安心できる環境が最優先で必要不可欠なことがわかった。

今後、生徒の思考力の育成について追究すると同時に、独自性と安心感が均衡する話し合い活動とは何かについて検討していきたい。

注

1) 経済協力開発機構 教育とスキルの未来(2020)
<https://www.oecd.org/en/about/projects/future-of-education-and-skills-2030.html#strand1> (最終閲覧日 2025 年 1 月 12 日)

2) 小島亜華里・泰山裕・里山春夫「思考スキルを指導する教師が重視する思考態度と指導事項」『日本教育工学会論文誌』(2022) p.1

3) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編』（東洋館出版社，2018）p.9